

食卓環境の色が心理に及ぼす影響

Psychological Effects of The Color of The Table Cloth at Mealtime

小野真紀子	Makiko Ono	京都府立大学	Kyoto Prefectural University
廣田 祐子	Yuko Hirota	京都府立大学	Kyoto Prefectural University
饗庭 照美	Terumi Aiba	京都光華女子大学	Kyoto Koka Women's Univ.
富田 圭子	Keiko Tomita	京都府立大学	Kyoto Prefectural University
大谷貴美子	Kimiko Otani	京都府立大学	Kyoto Prefectural University

キーワード：色、テーブルクロス、食卓空間、心理的影響

Color, Tablecloth, Dining Space, Psychological Effect

1. はじめに

空間に用いられる色は、視覚を通して人の心、感情に働きかけ様々な効果を示す。例えば暖色系の部屋は寒色系の部屋より暖かく感じるというように体感温度を変化させたり、また気分を高揚・沈静させる等の心理的效果が報告されている。私たちは食事をするとき、五感を駆使して食事を楽しむが、「目で食べる」「色で食べる」と言われているように、視覚からの情報は特に大きな役割を担っている。従って、食卓空間の色も同様に、食事をする者の心理に大きな影響を与えると考えられる。一般に暖色系は食欲を喚起させるため、食空間にふさわしい色であると言われているが、私たちは食空間に好ましい色とは、用いるシチュエーションや人々の体調・気分によって変化するものであると考えた。

本研究では、食空間における色の特徴とそれが与える心理的影響を明らかにし、心地よい食空間を演出するための基礎的なデータを得る目的で、今回は食卓空間に焦点を当て、ダイニングテーブルに様々な色のテーブルクロスと同色の皿をセットし、食卓の色から受ける様々な感情について調べることにした。

1. 調査方法

実験は2002年10月から12月にかけて京都府立大学の配食室で行った。9色(表1)の異なる色彩のクロスをかけた食卓を用意し、被験者にはその食卓に着席してもらった状態でアンケートに回答してもらった。被験者は本大学の学生70名で、繰り返し実験数は計219回であった。食卓には食空間を感じさせるため、ダイニングテーブルにそれぞれの色とほぼ同色のディナープレートと多目的に使用できるグラスをセッティングした。部屋の照度はカーテンを閉鎖し、400~600Lx付近とした。

アンケート内容は3部から構成されており、1部では食空間の色に対する意識を、2部では実験時の不定愁訴5項目、3部では各色の食卓に着いたときの心境について32の形容詞対SD法を用いて調べた。調査結果の分析は、SPSSを用いて統計処理を行った。

表1 使用したテーブルクロスのマンセル値

color	H	V	C
red	5.8R	4.6	13.4
yellow	7.5Y	8.7	9.4
green	7.9G	3.7	4
blue	1.1B	5.6	7.2
purple	7.7P	6.5	5.3
beige	2.0Y	8.5	1.4
gray	5.3PB	8.1	0.2
white	2.1PB	9.2	0.2
black	9.0PB	2.3	0.4

3. 結果及び考察

食卓の色の心理的影響の違いを明らかにする目的で32の形容詞対を主成分分析に供したところ、3つの因子が抽出された(表2)。因子を構成する形容詞対の内容及び信頼度を検証し、第1因子を「快活性」($\alpha = .9465$)、第2因子を「高尚性」($\alpha = .7915$)、第3因子を「優和性」($\alpha = .6800$)とした。

次に抽出された因子軸に対して各色がどのような位置づけになるのかを比較した。第1・第2成分と第2・第3成分をそれぞれ横軸・縦軸にとったグラフに色ごとの因子得点の平均値をプロットした。その結果を表3、表4に示す。黄・赤の暖色系では快活性が高く高尚性が低いのに対し、白・黒・グレーの無彩色では快活性が低く高尚性があるとされた。また、赤・紫・ベージュ・黄は優和性があるとされた。また、緑はどちらの因子においても中央に集中しており、

また癒しを感じる食卓であるかという質問項目に対しても、最も高い値を示した(表 5)。一方、白は実験前のアンケート調査で最も日常の食卓の色に使いたい色とされたが、本実験では、高尚性は高いが優和性に向け、また癒しの度合いもベージュほど高くなく、必ずしも最適な色とは言えなかった。不定愁訴の中の「食欲があるか」という項目に1点から5点を割り当てて得点化し、その結果と座りたい色との関係を調べたところ、食欲のない人は暖色や有彩色を選択しなかったが、食欲があると答えた人ほど暖色を選択する者が多く、色のバリエーションを楽しむ傾向が見られた。またどちらともいえない人が最も有彩色を好み、色による快活性を求める潜在意識が働いているのではないかと考えられた(表 6)。

表 2 食卓の色における心理的評価に関する因子分析結果

質問尺度	1成分	2成分	3成分	4成分
寂しい-楽しい	0.84264564	-0.097310703	0.265551277	-0.023715311
陰気な-陽気な	0.82681375	-0.228405001	0.24069072	-0.065518222
開放的な-閉鎖的な	0.82490476	-0.227843938	0.021450265	-0.042460347
健康な-不健康な	0.81346977	0.057688279	0.063093547	0.174186237
憂鬱な-うきうきする	0.80890434	-0.064253302	0.288635911	-0.033499072
生気のない-生気のある	0.80048852	-0.16333569	0.190799661	-0.068829382
狭々しい-広々した	0.77474361	0.020816298	-0.05327279	0.070710346
幸せな-悲しい	0.75511696	0.046289526	0.386204695	0.136789815
食欲のわく-食欲のわかない	0.73749019	0.185992318	0.124189598	0.248018182
好きな-嫌いな	0.66074001	0.431921751	0.179510748	0.269381076
団然的な-団然的でない	0.63884838	-0.144925482	0.247878838	0.277962769
楽しみのある-楽しみのない	0.62661115	0.124033793	0.246855884	0.403458124
情緒に乏しい-情緒豊かな	0.59279607	0.086243735	0.4510857	0.005854961
居心地の悪い-居心地の良い	0.539419	0.50317345	0.188396663	0.371777892
下品な-上品な	-0.029483199	0.83634677	0.107228296	-0.049765971
子供の-大人の	-0.34459976	0.7622896	0.046382973	-0.038251742
洗練された-野暮ったい	0.179821038	0.74840684	-0.09458742	-0.277687405
落ち付きのある-落ち着きのない	-0.182011926	0.71496288	-0.00638425	0.349189531
暖かい-涼しい	0.42457623	-0.168905833	0.69051915	-0.01817014
男性的-女性的	-0.006830932	0.213661743	0.68474778	0.266646566
穿い-暑い	0.449928013	-0.30520675	0.59894583	-0.091750236
ロマンチックな-現実的な	0.236914355	0.249249754	0.55550671	-0.281058589
庶民的な-ゴージャスな	0.064125439	0.190171841	0.228765559	-0.749831143
狭張した-寛いだ	0.283485339	0.042461738	0.230624804	0.730187708
人工的な-ナチュラルな	0.498360272	0.333139748	-0.03594978	0.528232279
固有値	8.582	3.399	2.549	2.315
寄与率	39.46	14.20	8.20	5.51

表 3 第1成分(快活性の因子)×第2成分(高尚性の因子)

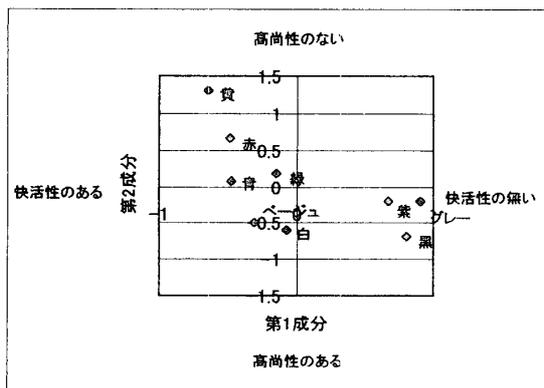


表 4 第2成分(高尚性の因子)×第3成分(華やかさの因子)

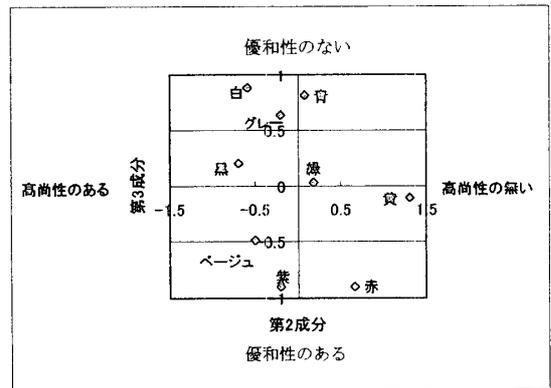


表 5 癒しを感じる食卓の色

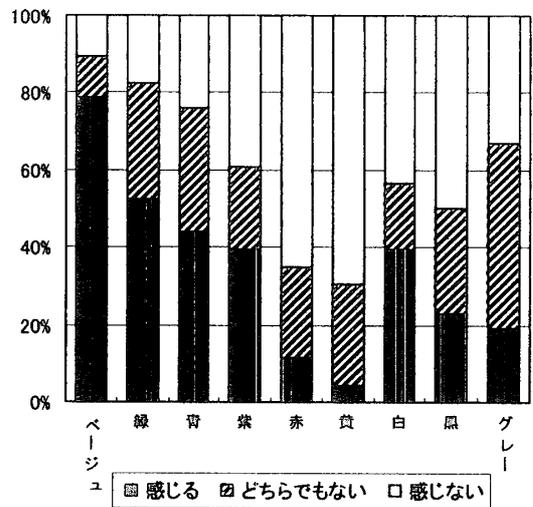
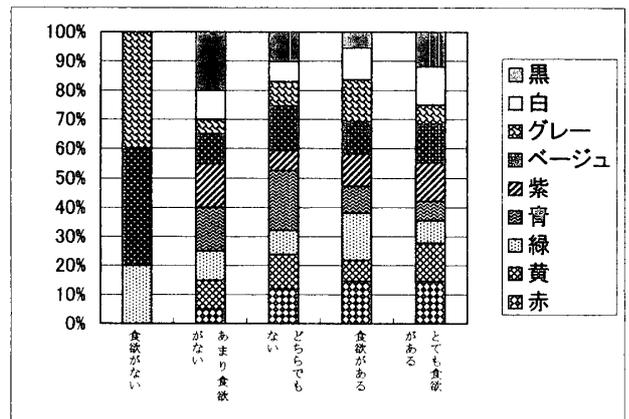


表 6 食欲の有無と選択色の関係



これらの結果から、食卓に心地よさを感じる色は、個人の生理的、心理的状态、季節、食文化などに大きく影響されることが示された。「食」とは単に栄養成分を体内に入れる場所ではなく、TPOに対応し、心に響く食空間の色を選ぶことにより、病院や福祉施設、給食施設や幼稚園など様々な場所にも対応でき、快適な食空間を演出していくことが出来ると示唆された。今後、さらに環境条件を一定にするなどして、研究を進める予定である。